

強者の戦略

2026 年度 京大世界史 第 2 問 [問題編]

京大世界史では 2025 年度に続き、2026 年度でも「資料の読み取り問題」や「文章を踏まえて」という思考問題が出題されました。今回の 2026 年度の第 2 問で思考問題にぜひチャレンジしてみてください。

Ⅱ 世界史探究問題

次の文章 (A, B) を読み、下線部(1)～(29)について後の問に答えよ。解答はすべて所定の解答欄に記入せよ。

A 15 世紀以前の西アジアでは、騎馬遊牧民の軍事力が戦場において圧倒的優位を保っていたが、この状況は 16 世紀を境に徐々に変化していった。

13 世紀前半にモンゴルが (1) 西アジアへの進出を開始すると、この地域の情勢は激変した。モンゴル軍は (2) 1243 年にアナトリア東部のキョセ＝ダグで行われた戦闘で現地の (3) セルジューク朝勢力を撃破し、これを服属させた。また、1258 年にはバグダードを占領し、(4) アッバース朝最後のカリフを処刑した。モンゴル軍はさらにシリアへの進出を目指すか、この企ては (5) 新興のマムルーク朝により阻止された。一連の征服活動の結果、イラン、イラクは (6) イル＝ハン国の領土となった。以後、およそ 1 世紀の間、西アジア地域では、西にマムルーク朝、東にイル＝ハン国という、いずれも遊牧民に出自をもつ騎兵を (7) 軍隊の中核に据えた国家が対峙することになった。

イル＝ハン国は 14 世紀半ばには崩壊し、その後、イランとその周辺には様々な地方政権が成立した。つづく 14 世紀後半から 15 世紀初めにはティムールがイランのほかシリア、(8) アナトリアにまで進出し、一時的にイランは再統一された。しかし、15 世紀後半になるとイランの西部は (9) ティムール朝の支配から離脱した。

16 世紀に入ると、西アジアの勢力図は再び大きく変化した。この世紀の初め、中央アジア北方の草原地帯で勢力を拡張していた (10) トルコ系遊牧民のシャイバーニー朝が南下してティムール朝を破り、中央アジアからイラン東部へと進出した。滅亡したティムール朝の王族の一人であるバーブルは、南方に活路を見出し、のちにインドで (11) ムガル帝国を建設した。

同じく 16 世紀の初め、イラン西部では、神秘主義教団に起源を持つサファヴィー朝が、やはりトルコ系遊牧民の軍事力を背景に建国し、1510 年にはシャイバーニー朝との戦闘に勝利してイラン東部も奪った。こうして、イランはサファヴィー朝のもとに再び統一された。さらにサファヴィー朝はアナトリアへの進出をねらったが、1514 年にアナトリア東部の (12) チャルディランの戦いで (13) 火器を有効に活用したオスマン

強者の戦略

帝国軍に敗れ、その試みは頓挫した。この頃から徐々にではあるが、⁽¹⁴⁾ 西アジア地域でも火器を操る歩兵が戦場で重要な役割を果たすようになり、騎兵の地位が相対的に低下してゆく。オスマン帝国は1517年にマムルーク朝を滅ぼし、シリア、エジプトも領有した。こうして、16世紀前半以降、西アジアから南アジアにかけて、オスマン帝国、サファヴィー朝、ムガル帝国という3つの大国が並立することになるのである。

問

- (1) この進出は、当時中央アジア、イランを支配下に置いた国との対立を直接の原因とするものであった。この国の名を答えよ。
- (2) その2年前、モンゴル軍は東欧でドイツ・ポーランド連合軍を破っている。この戦いの名を答えよ。
- (3) この王朝の始祖は、アッバース朝カリフから「スルタン」という称号を授与された。スルタンの語義を答えよ。
- (4) 4人の正統カリフや、ウマイヤ朝およびアッバース朝の歴代のカリフはすべてイスラム教の預言者ムハンマドと同じ部族に属していた。この部族名を答えよ。
- (5) 次の文章は、マムルーク朝後期の歴史家マクリージー（1442年没）の『諸王朝の知識の旅』に収められる、モンゴル軍とマムルーク朝軍の決戦の様相を伝える箇所の一部である。これを読んで下の問(ア)、(イ)に答えよ。

アミール*たちに命令が下った。彼らが集まると、[スルタンのムザッファル＝クトゥズ**]はタタール人***と戦うべく檄^{ひき}を飛ばした。(中略)それから[スルタンは]アミールのバイバルスに、一隊を率いて進軍するように命じた。彼は進軍してタタール人の前衛を発見すると、スルタンの書状でそれを知らせ、攻めては引き返す小競り合いを続けた。そしてついに、スルタンがアイン＝ジャールート****に姿を見せた。(ア)の代官であるキトブガーとバイダラーは、[マムルーク朝の]軍隊が進軍してきたとの知らせが届くと、シリア地方に散らばっていたタタール人を結集し、^(イ) ムスリムたちとの戦いに向けて出発した。

(注) *軍団長の意。 **当時のマムルーク朝スルタン。

***ここでは「モンゴル人」を意味する。

****パレスチナに位置する両軍の決戦の地の名称。

(出典 歴史学研究会編『世界史史料 2』岩波書店、2009年、197ページ。出題に際して一部改変)

- (ア) 空欄(ア)には、当時モンゴル西征軍を委ねられていたチンギス家の人物の名が入る。その人物の名を答えよ。
- (イ) 下線部(イ)について、著者マクリージーはこの箇所で、マムルーク朝軍を「ムスリムたち」と表現している。マクリージーがこのような表現を選択した理由として最も適切と考えられるものを簡潔に述べよ。

強者の戦略

- (6) この国の宰相であったラシード＝アッディーンは、歴史書『集史』を著した。この作品が書かれた言語の名称を答えよ。
- (7) 両国はともに、軍隊を維持するため、俸給の代わりに一定の土地の徴税権を軍人に与える制度を採用していた。イスラーム史上、この制度を最初に導入したとされる国の名を答えよ。
- (8) この時ティムールと戦って敗れたオスマン帝国君主の名を答えよ。
- (9) ティムールにより首都とされ、繁栄した中央アジアの都市の名を答えよ。
- (10) この国を建設し、ティムール朝を滅ぼした集団の名称を答えよ。
- (11) この国の第3代君主はイスラーム法で非ムスリムに課されるものと規定されていた税を廃止した。この税のアラビア語の名称を答えよ。
- (12) この戦いで敗れたサファヴィー朝の君主の名を答えよ。
- (13) この戦いにおいては、鉄砲で武装したスルタン直属の歩兵常備軍が活躍した。この常備軍の名称を答えよ。
- (14) サファヴィー朝でも16世紀末に即位した君主が、銃兵隊、砲兵隊を新設している。この君主の名を答えよ。

B 黄河と (15) 長江は、いずれも現在の青海省に源流を發し、大陸東方に広がる海へ注いでいる。この両大河にはさまれた地域を流れる河川を利用して運河を建設し、水路で往来しようとする試みは古く (16) 春秋・戦国時代から行われてきた。ただ、建設した運河の維持は容易でなく、河底に堆積する泥土により運河が使用不能となることも珍しくなかった。

いわゆる「大運河」が完成したのは、隋の時代である。6世紀末、(17) 禪讓により北周に替り王朝を建てた楊堅は、春秋時代に開かれた運河を利用して (18) 山陽瀆を建設した。次いで即位した煬帝は (19) 通濟渠を開鑿し、さらに (20) 高句麗出兵の準備として永濟渠を建設した。しかし、矢継ぎ早に行われた大運河の建設は、民衆に多大な負担をかける結果となり、各地で (21) 反乱が續発することとなった。

大運河が物資輸送の大動脈として活用されるようになるのは、8世紀以降のことである。8世紀半ば、(22) 安祿山らが起こした反乱により財政危機に瀕した唐王朝は塩の専売を実施したが、このことは、(23) 華北から江南地方へと穀物生産の重心が移動しつつあったことと相俟って、大運河の果たす役割を飛躍的に高めた。

(24) 五代から北宋時代にかけて、大運河による物資輸送(漕運)は一層盛んとなった。

(25) 帝都を貫いて流れる大運河沿いの風景を活写したとされる絵画からも、その繁栄ぶ

強者の戦略

りをうかがい知ることができる。しかしその栄華も、12世紀初めに⁽²⁶⁾ 女真の建てた金の軍隊が華北を占領したことによりあっけなく終焉を迎え、漕運は衰退し大運河も荒廃してしまった。

大運河が復活したのは、元が⁽²⁷⁾ 南宋を滅ぼした後のことである。元は⁽²⁸⁾ 陸路や海路を利用して世界中の富を都の大都に集めようとした。中国でも当初は海運による物資輸送を試みたが、やがて会通河を建設して漕運の復活を試みた。15世紀初め、永楽帝により会通河は改修され、大運河は江南地方と北京を結ぶ大動脈として⁽²⁹⁾ 清代まで盛んに利用されることとなった。

問

- (15) 長江文明を代表する遺跡の一つに河姆渡遺跡がある。発掘調査の結果、そこではある作物が人工的な施設により栽培されていたことが明らかとなった。その栽培作物の名を答えよ。
- (16) 春秋・戦国時代には、新たな農具を使用することにより農業生産力が格段に向上したとされる。その農具の材質を答えよ。
- (17) 「禅讓」に対して、武力により政権を奪取することを何というか。漢字 2 文字で答えよ。
- (18) 587 年に山陽瀆が建設された目的について、簡潔に説明せよ。
- (19) 通済渠が結んでいた二つの河川の名を答えよ。
- (20) 高句麗は 7 世紀半ばに唐王朝の攻撃を受けて滅亡する。その後、唐の勢力を駆逐して朝鮮半島を統一した国家の名を答えよ。
- (21) 隋末の反乱勢力の中から台頭し、唐王朝を建てた人物の名を答えよ。
- (22) 反乱の原因は、玄宗の^{ちよう}寵妃の一族に連なる人物と安禄山が朝廷で対立したことにあるとされる。その寵妃の呼び名を答えよ。
- (23) 北宋から南宋時代にかけて、長江下流域が農業生産の中心となったことを端的に言い表したことばに「○○熟すれば天下足る」がある。○○に当てはまる最も適切な語句を漢字で答えよ。
- (24) 五代から北宋にかけての時代には、科学技術の面でも大きな革新が見られた。次の史料で蘇軾が言及している技術とは何か。

わたくしはかつて老先生から「自分の若い頃は『史記』や『漢書』を求めても得られず、運よく手に入ったならばみな手ずからそれを筆写し、日夜必死で暗誦した」とうかがったことがある。ところが近年では、商売人がさまざまな学者の書物を刊行し、一日に膨大な枚数を流布させている。

(蘇軾「李氏山房蔵書記」)

強者の戦略

- (25) 北宋末の画家張択端によって描かれたこの絵画の題名を答えよ。
- (26) 金軍が華北に侵攻するきっかけとなったのは、北宋が国境を接していたある国家を、金と結んで挟撃しようとする作戦であった。この国家を建てた民族の名を答えよ。
- (27) 南宋時代に宋学を大成した朱熹は、儒教の經典のうち「四書」を重視したとされる。四書に含まれる書物のうち、『論語』『孟子』『大学』以外の書名を答えよ。
- (28) 元の陸上交通は駅伝制度によって支えられていた。この制度はモンゴル語で何と呼ばれていたか。カタカナで答えよ。
- (29) 清の康熙帝は、大運河を利用して六度にわたり江南地方に巡幸した。最初の巡幸は1684年に行われたが、その直前には、中国大陸南部で起こった大反乱を鎮圧している。その反乱の名称を答えよ。

2026年度 京大世界史 第2問 [解答解説編]

【解答】

A

- (1) ホラズム＝シャー朝
- (2) ワールシュタット（リーグニッツ、レグニツァ）の戦い
- (3) スンナ派の世俗君主
- (4) クライシュ族
- (5) (ア) フレグ（フラグ）
(イ) 非ムスリムであるモンゴル人と、ムスリムとの対立を強調するため。
- (6) ペルシア語
- (7) ブワイフ朝
- (8) バヤジット1世
- (9) サマルカンド
- (10) 遊牧ウズベク（ウズベク人）
- (11) ジズヤ
- (12) イスマーイール（1世）
- (13) イェニチェリ
- (14) アッバース1世
- (15) 稲
- (16) 鉄
- (17) 放伐
- (18) 南朝の陳を攻撃するための兵や物資を運搬するため。
- (19) 黄河、淮河（淮水）
- (20) 新羅
- (21) 李淵

強者の戦略

- (22) 楊貴妃
- (23) 蘇湖（江浙）
- (24) 木版印刷
- (25) 「清明上河図」
- (26) キタイ（契丹）
- (27) 『中庸』
- (28) ジャムチ
- (29) 三藩の乱

【解説】

ここでは論述問題を中心に解説します。単なる論述問題ではなく、2025年に続き（5）や（24）の様に「資料の読み取り問題」が出題されました。

A

- (3) この王朝の始祖は、アッバース朝カリフから「スルタン」という称号を授与された。スルトンの語義を答えよ。

→論題は「スルタン」の語義を答える問題です。

語義とは「言葉の意味」であり、「スルタン」とはアラビア語で“権力”や“支配力”“統治権”を指す言葉です。

しかしここでの語義は、この王朝（セルジューク朝）の始祖であるトゥグリル＝ベクがアッバース朝カリフから授与された「スルタン」の意味です。つまり、イスラーム世界の最高指導者である「カリフ」に対し、主に世俗的・政治的な統治権を象徴する称号が「スルタン」です。トゥグリル＝ベクは、1055年にバグダードを占領し、ブワイフ朝に代わって支配権を握り、“カリフからイスラーム法の執行権を与えられた者”として世俗の権力を持つ指導者となります。そしてその後、スンナ派の諸王朝で世俗的な権力者としてスルトンの称号が一般化することとなります。（シーア派ではサファヴィー朝のようにシャーを使用）

(5)

(イ) 著者マクリージーはこの箇所を、マムルーク朝軍を「ムスリムたち」と表現している。マクリージーがこのような表現を選択した理由として最も適切と考えられるものを簡潔に述べよ。

→論題は、マクリージーがこのような（マムルーク朝軍を「ムスリムたち」とした）表現を選択した理由です。

筆者はマムルーク朝後期の歴史家マクリージーとあります。マムルーク朝の歴史家のため、もちろん彼はムスリムと考えられますが、対してこの文章の中で書かれているタタール人、モンゴル人は非ムスリムです。

また「(ア) (問アからフラグ、フレグ)」の代官であるキトブガーとバイダラ

強者の戦略

一は、[マムルーク朝の]軍隊が進軍してきたとの知らせが届くと、シリア地方に散らばっていたタタール人を結集し、ムスリムたちとの戦いに向けて出発した。この文章と問題アの解答から、キトブガーとバイダラー側はフラグの代官であり、彼らモンゴル人側がムスリムたちとの戦いに向けて出発した、という表現を歴史家マクリージーが選択したのは、非ムスリムとムスリムの戦いであったことを表現（強調）するためと考えられます。

B

(18) 587年に山陽瀆（さんようとく）が建設された目的について、簡潔に説明せよ。

→論題は、587年に山陽瀆（さんようとく）が建設された目的です。

北周から禅譲された隋は589年に陳を滅ぼして中国統一を成し遂げます。その2年前に建設された山陽瀆（さんようとく）の目的は陳を滅ぼすための兵や物資の運搬のためにこの運河を建設したと考えられます。

(24) 五代から北宋にかけての時代には、科学技術の面でも大きな革新が見られた。次の史料で蘇軾が言及している技術とは何か。

→論題は、史料で蘇軾が言及している技術とは何かです。

史料に「自分の若い頃は『史記』や『漢書』を求めても得られず、運よく手に入ったならばみな手ずからそれを筆写し」とあり、「近年では、商売人がさまざまな学者の書物を刊行し、一日に厩大な枚数を流布させている。」とあります。これが科学技術面の変革です。本を筆写から刊行へ変革させたのは木版印刷と考えられます。